

Media
Platform
Lab

ラジオ業界と通信業界を融合させて IPサイマルラジオ「radiko.jp」を 運営

2012年7月に誕生したばかりのメディアプラットフォームラボ。全国のラジオ放送局67局と放送大学の番組をPCやスマートフォン、タブレットといった多様なデバイスを通じて聴けるradiko.jpの運営を手掛けている。NTTグループならではのICTを活かして同サービスの安定した運営を目指しているほか、新規ビジネスの創出にも意欲を燃やしている同社の窪菌電二（くぼその りゅうじ）社長に、今後の展望も含めて詳しくお話を伺った。

NTTスマートコネクトなど 3社のジョイントベンチャーとして生まれる

◆貴社の設立背景を教えてください。

メディアプラットフォームラボは2012年7月、NTTスマートコネクト、株式会社radiko、朝日放送株式会社によるジョイントベンチャーとして設立されました。当社を通じて3社は以下のことを期待しています。NTTスマートコネクトからは、コンテンツ配信事業の拡大とインターネットプラットフォームを活かした新規ビジネスの展開、また、radikoからは月間1000万人を超えるユニークユーザ数を誇るradiko.jpの安定したサービス提供の実現、そして朝日放送にとっては放送コンテンツ配信技術を活かした新規ビジネスの拡大。

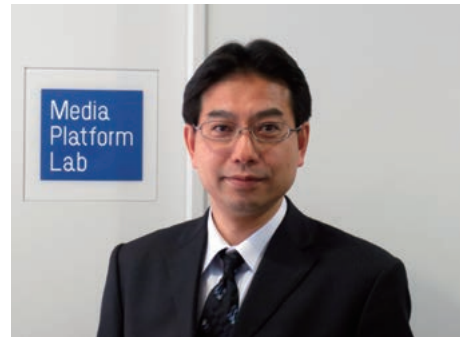
◆大阪を拠点に選んだ理由はありますか。

radikoの前身である「IPラジオ研究協議会」がもともと大阪のラジオ放送局が中心となって設立されたものだったことに由来します。同協議会は2007年に発足し、大阪エリア限定で在阪ラジオ局6局の試験配信を行っていました。その後、2009年に東京のラジオ局が加わって「IPサイマルラジオ協議会」となり、2010年のradikoの会社設立に至ります。

第一のミッションは radiko.jpの安定的な運営

◆業務概要をお聞かせください。

当社事業には3つの柱があります。一番重要なのは、radiko.jpのプラットフォームの安定運用です。2番目は新規ビジネス開発です。radiko.jpの顧客基盤および当社の所



メディアプラットフォームラボ 窪菌電二社長

有する配信環境やICTを利用した、リスナー向けやラジオ放送局向けの新規ビジネスを模索しています。具体的には、ラジオ放送局が、楽曲等の権利を伴うコンテンツ配信の内容を音楽著作権団体等に提出する業務を最新の研究技術を活用し支援する「全曲報告サービス」の開発や、ECにつながる仕組みの開発を考えています。3番目は次世代メディアプラットフォームの設計および技術開発です。音声だけでなく、さまざまなメディアコンテンツ配信の検討を進めています。



◆radiko.jpとはどのようなサービスですか。

従来、ラジオはラジカセなどの受信機で聴くのが一般的でした。しかし近年では都市部の高層マンションなどで難聴エリアがあったり、ラジカセなどの受信機がどんどん減っていたりする中で、ラジオに接触する機会が圧倒的に減少しています。そこで、ラジオ業界がユーザを増やすために2010年12月に立ち上げたのがradikoという会社です。

同社の提供するradiko.jpは、インターネットのIP通信を利用して地上波ラジオと同じコンテンツを配信しているIPサイマルラジオサービスです。今では1家に1台が当たり前になったPCや、1人が1台を所有しているスマートフォンやタブレットといった身近なデバイスを通じてラジオが視聴できるサービスです。

2013年4月には、「番組検索機能」「コンテンツクリップ機能」「オンエア曲購入機能」を追加し、全面リニューアルされました。今まで以上にリスナーの方々に、ラジオコンテンツをお楽しみいただけるものとなっています。

◆radiko.jpの強みを教えてください。

radiko.jpには2013年4月現在、ラジオ放送局67局と放送大学が参加しており、それが最大の強みとなって多くのユーザに支持されています。視聴エリアは、ラジオ放送局の営業エリアに合わせた配信となっています。例えば、関西エリアでは、地上波ラジオと同じラジオ放送局（9局）と放送大学のラジオコンテンツが視聴できます。

通常の通信環境下なら音質も極めてクリアですし、PCだとWebサイト（http://radiko.jp/）にアクセスするだけ、スマートフォンならアプリ（無料）をダウンロードすればすぐに視聴できるなど、簡単に利用できるのもradiko.jpの優れた点といえます。

◆どんな場面でradiko.jpを聴く人が多いですか。

通勤や通学中にスマートフォンなどを通じてご利用いただいているほか、オフィスのPCから聴いている方も多くいます。仕事をしながらラジオを聴くシチュエーションも十分に考えられます。夏期には高校野球を聴く方も多くいます。また、深夜でも人気番組には、相当のアクセス数があります。そういった意味では、幅広い年齢層の方に時間・場所を問わず視聴いただいているといえます。もちろんラジオカセや車などで地上波ラジオを聴く方も大勢いらっしゃいますが、そういった層とradiko.jpのユーザ層はうまく補完し合う関係にあるといえます。

NTTならではの知見を活かした クラウドサービスが基盤

◆貴社はradiko.jpにどのようなかたちでかかわっていますか。

私たち自身がradikoの技術部隊との認識を持ち、一体となった業務運営、サービス開発を手掛けています。より良いサービスを実現するために当社のメンバだけではなくNTTスマートコネクトなどのNTTグループ企業と連携しながら業務を進めています。具体的には、全国のラジオ放送局からラジオコンテンツがメディアセンタに集められ、NTTスマートコネクトのデータセンタから配信が行われています。radiko.jpの配信設備が収容されているデータセンタは、堅牢でセキュアな信頼性の高いファシリティ性を有しており24時間365日での運用体制を維持しています。NTTスマートコネクトというICT専門の部隊だからこそ可能な業務です。ラジオコンテンツの配信と聞くとなんだか通信事業とはかけ離れていてNTTらしくない仕事だと思われるかもしれませんが、実際にはクラウドサービスを使っているのです。NTTならではの技術力と知見を活用しています。

◆NTTグループへの貢献についてはどうお考えですか。

現在は、通信技術も確立され、インフラ構築に関しても高速広帯域の通信環境が十分に広いエリアをカバーできていると思います。これからは新しい領域に取り組んでいくことが求められています。当社が、ラジオ放送局や広告代理店といった他業界とアライアンスを組むことで、NTTが今まで取り組んだことのない新しい領域に踏み出すことが可能となってきました。そういった意味で、通信以外の新たな領域への先駆けとなれたと自負しています。NTTグループには研究所で確立された最新の技術がありますから、他業界のサービスにさらに高い付加価値を与えることができると考えています。当社が先駆けとなって走ることで、

NTTグループ全体も勢いを増すことを望んでいます。

多様なメディアへの展開や 防災系コンテンツの配信も視野に

◆今後の展望をお聞かせください。

まずはradiko.jpという高い付加価値を持つ配信サービスをしっかり安定運用していくことが最重要ミッションです。それができるようになったうえで、音声メディアに限らず幅広いデジタルメディアにも挑戦していけたらと思っています。

◆特に力を入れていきたい分野はありますか。

強いて挙げるのであれば、防災系のコンテンツ配信を意識しています。東日本大震災のときにラジオというメディアの便利さが再認識されました。ラジオの地上波は地域ごとに聴ける局が決まっていますが、radiko.jpの仕組みを使えば、エリア制限を取り払って全国でどの局の放送も聴くことができます。実際、東日本大震災には、radiko.jpではエリアフリーでの配信を実施しました。しかも、スマートフォンといった身近なデバイスを利用して聴くことが可能です。そういった意味で、単なるラジオコンテンツの配信といった領域にとどまらず、安心・安全な社会の実現に向け貢献できるものになる可能性を秘めているサービスといえます。

まだ7名の小さな会社 苦しいときも笑顔を決さず業務にあたる

◆貴社の社風はどのようなものですか。

昨年立ち上げたばかりで、メンバが7名の小さな会社ですから、社風らしい社風もまだありません。これから私たちがつくっていくのだと思います。社員はNTT西日本やradikoからの出向者で、通信と放送という本来は異なる業界に属している人たちが一緒に働いています。それぞれに専門的な知識や人脈を有しており、東京などへの出張も多く、全員が顔を合わせる機会は週に数回しかありませんが、皆精力的に動き回っています。私も時間が許す限り訪問するように心掛けており、社員がそろったときにはランチに行くなど、楽しい席での交流も行っています。

◆社員の方々へのメッセージをお願いします。

現在はスマートフォンやタブレットが普及して、ビジネススタイルもライフスタイルも大きな変化を遂げている時代。私たちはその中で多くの方々をワクワクさせるような新しいサービスを創出していかなくてはなりません。初めてのことでばかりで、思いどおりにいかないことも多々ありますが、社員には常日頃から「苦しいときにも笑顔を決さずやっつけよう」と声をかけています。その姿勢こそが当社の社風になっていけばと願っています。

私たちの夢は「新しいスタイルをつくる」ということ。その思いを共有しながら、社員と一緒にこれからも新しい挑戦を続けていきたいと思っています。

リッチコンテンツを多くの人に届けるため ラジオコンテンツをSNSや多様なデバイスにつなぐ

取締役 所長 兼 技術戦略部長 香取 啓志 (かんどり けいし) さん
事業企画部担当課長 兼 主任研究員 有吉 尚道 (ありよし なおみち) さん

radiko.jpの安定運営のほかに SNSとの連動などの付加価値創造も図る

◆メディアプラットフォームラボの業務内容を教えてください。

radiko.jpを安定した状態で動かすことが最大のミッションです。運用業務の中では、全ラジオ放送局からのラジオコンテンツがきちんと配信されているか、朝夕全チャンネルを視聴確認をしています。また、当社では仕事でもさまざまな局の番組を流しっぱなしにし、途切れたりしないかどうか常に気を配っています。



香取啓志所長

また、radiko.jpはただラジオ番組が聴けるだけのサービスではありません。例えば番組タイトルや出演者、オンエア中の楽曲などの情報が画面上に表示されるので、「今かかっている曲のタイトルは何だろう？」と思ったときにもすぐ確認できます。もちろん番組表を見ることもできます。

さらに、気に入った番組についてFacebookやTwitter上でつぶやくことで、友人と番組情報をシェアでき、SNS上の交流もより楽しめます。こういった、地上波にはないradiko.jpの魅力を生み出すのも私たちの仕事です。

◆radiko.jp運営上の課題はありますか。

地上波のラジオも電波状況によって音がクリアになったり雑音が入ったりしますが、radiko.jpの場合はそれとは異なる理由で聴取障害が起きます。例えば通常の通信環境にて音質がクリアだったとしても、地下鉄に乗っているとスマートフォンではradiko.jpが聴けないということが起こり得ます。これは一例ですが、地上波とは異なるインターネットならではの課題にも解決していく必要があります。

また、ラジオ放送局67局と放送大学のコンテンツが集まっているのがradiko.jpの強みですが、そのリッチなコンテンツをいかにして多くのユーザーに届けるかというのが課題です。今はPCやスマートフォンでの聴取が主流です。これが将来的にネットにつながり音声再生できる新たなデバイスが普及してくればいつでも対応できるように柔軟に仕組みを変えていかなくてはなりません。これは当社がずっと抱え続ける課題になるでしょう。

◆radiko.jpを将来的にどのようなものにしていきたいですか。

まずはradiko.jpを安定的に運営していくことが重要ですが、そろそろ体制も整ってきており、今年度からは次世代に向けた仕組みを考える段階に入りたいと思います。



有吉尚道担当課長

次なるステップとして

には実にさまざまな可能性があるでしょう。例えば従来の地上波のラジオはテープに録音することができましたよね。同じようにradiko.jpでも、一度聴いた番組や聴き逃した番組が聴けたら便利ではないかと、ユーザーが過去の番組表を閲覧して、気になる番組を押すと聴けるようなサービスの仕組みがすでにできつつあります。好きなタレントを登録しておく、その人が出ているラジオ番組を自動で聴けるようにするサービスも実現可能と考えています。

また、お薦めの番組があれば、友人に番組表を送ってシェアできるような機能も便利かもしれません。SNSとradiko.jpのかかわり方については、ユーザーのニーズも汲み取りながら今後さまざまなアイデアを提案していきたいです。

スマートフォンやタブレットといった新しいデバイスの普及によって、このような新しい仕組みを考えて実行できるようになりました。今までのメディアとデバイスの組み合わせではできなかった新しい楽しいことがどんどん実現できます。そういうサービスをradikoと一体となって実現し、いち早くリリースしていきたいですね。

全曲報告サービスによって ラジオ局のJASRACへの報告を簡便化

◆サービス開発業務についてお聞かせください。

1つのサービス開発案件が発生した際に、そのサービスの仕様を考え、提供価格を決め、開発管理や進捗管理をし、リリースまで行うという一連の流れがサービス開発業務の1つです。実際に手掛けた案件として、「全曲報告サービス」があります。

◆全曲報告サービスとはどのようなものですか。

今まで、ラジオ放送局は自局が放送した楽曲についてJASRAC(日本音楽著作権協会)に報告するためにサンプリング報告を行っていました。しかし、これでは一部のサ

ンプルによって全体の楽曲数を推定するため、実際に放送された楽曲の数が正確には分かりません。また、各ラジオ放送局には13週に1度この報告義務の割り当てが回ってくるシステムになっており、そのたびに手作業で集計しなければなりません。

そこで当社はNTTデータと協力しながら、研究所の技術を利用した放送音源とシンクロアド技術により、ラジオで流されるすべての楽曲を検知し、自動集計することにしました。楽曲名や利用年月などを報告書にまとめて各ラジオ放送局へ報告するサービスとして2013年4月より「全曲報告サービス」として提供することとなりました。

◆今後展開していきたいサービスはありますか。

radiko.jpの利用拡大により、ラジオを聴くシチュエーションは、格段に広がったと思いますが、一方で、車を運転しながらラジオを聴くリスナーの方々も多数おられます。そこにフォーカスしてradiko.jpを普及させたいです。具体的にはカーナビに入れることを考えています。すでに米国ではネットラジオサービスが、高級車に実装されているくらいなので、日本にもそういう時代がすぐ来るのではない

でしょうか。日本でもすでに、ハイエンド（最高級）の車種の中には、通信機能付きカーナビが搭載されているものもあります。その延長線上に、IPラジオがプラスαのサービスとして加えられることも可能と考えています。

ほかにも構想はたくさんあります。ラジオを聴く専門のデバイスとしてではなく、日常的に使う製品の中にさりげなくボタンがあって、それを押すとラジオを聴けるというのが理想的です。ユーザが帰宅したらラジオから自動的にBGMが流れるようにするといったアイデアもあるでしょう。現状でも、LEDの照明の中にBluetoothを埋め込み、BGMを流すという製品を国内メーカーがすでに誕生させていますから、ラジオを入れることも仕組み的には可能だと思います。

また、防災関連でも情報を集め、多角的に配信するサービスを実現していきたいです。地震や津波、河川氾濫といった災害が起こったときに、必要な情報を多様なかたちで伝えられたらと、この分野にも力を入れていきたいです。

(インタビュー：村上百合)

メディアプラットフォームラボ ア・ラ・カルト

■「メディアプラットフォームラボ事業連絡会2013」を今年3月に実施

昨年誕生したばかりのメディアプラットフォームラボに関する知識・理解を深めていただくため、2013年3月4日に大阪市内の中央電気倶楽部にて「メディアプラットフォームラボ事業連絡会2013」が実施されました（写真1）。radiko.jp参加のラジオ放送局技術担当の方々や、radiko、朝日放送、NTTスマートコネクトからもお越しいただき想定を上回る約80名の盛大なイベントとなりました。

■予定時間を押すほど盛り上がった座談会

社員紹介や事業紹介の他、「ラジオの可能性」というテーマでの座談会が行われました（写真2）。この座談会は1時間だった予定時間が1時間20分に延長されるほどの白熱ぶり。関西大学の三浦文夫教授や大阪ならではのラジオパーソナリティの方々にもご参加いただき、さまざまな視点からラジオに関する意見が出される興味深いひと時となりました。

■光BOX+などの取り組みの展示も

同連絡会ではさまざまな製品も展示されました。radiko.jpが組み込まれている情報機器「光BOX+」や、車のダッシュボード内にradiko.jpを組み込み、スピーカーからラジオコンテンツを配信するデモ展示、LEDの照明器具にスピーカーを組み込んだ商品からradiko.jpを配信するもの、防災情報をradiko.jpに配信し表示するなど今後の同社の取り組みのヒントになる製品がいっつも展示されました（写真3、4）。



写真1



写真2



写真3



写真4